国木田独歩考（第二部）

―作品、文体とを中心として―

小林茂大

独歩の小説は未完に終った「暴風」以外は悉く短篇である。福田恒存氏は「作家論」の中で長篇と短篇の違いを次のように言っている。

短篇と長篇の差はたゞ量の大小によるのではなく、その違いの本質的な点は長篇がダイナミック（dynamic）なのに対して短篇はスタテック（static）な点にある。ダイナミックな長篇小説に於ては「作品の主人公が、のみならず作者が、作品を形成する過程に於て自分の位置を逐次に移動」せしめる。「創作のはじめに於ける主人公ないしは作者の位置は、その創作の完了時におけるそれと異った場所にある」と言える。こうしたものは主人公即作者というイッヒ・ロマン（Ich-Roman）やわが国の私小説の形をとることが多い。それに対してスタテックな短篇は、そこに描かれているものは、たとえ数日或は数年に亘る事件であっても、永遠を担った一瞬時の人生断面図でなければならない。作品の中に最後の数行に於てであるが、そういう一瞬間がなければならず、数日、数年に亘る事件もその一瞬間を形成するための用意に過ぎないのである。そしてその一瞬間に於てそれまで動いていた時間は完全に停止してそこに永遠が現われる。この時間の停止の故に正統的な短篇小説は読者にスタテックな感じを与える。そしてこの一瞬間の定着は作品の「落ち」を形づくる。「落ち」というのは、落語などにある「落ち」と同じ性格を持つものであるが、落語などの「落ち」は多く言葉の「落ち」に終っているが、そういう言葉だけの表面的なものでなく、作品の中に於ける散文的な事実の世界から一挙にして抽象の領域に飛躍するスプリングボードの役割をするところのものである。落語や通俗小説に於ては、それは現実世界から飛躍すると言うよりはむしろ脱落であり逃避であるが、本当の短篇小説に於けるそれは飛躍でなければならない。そしてその飛躍を可能ならしめるところのものは、常にその作品の裏打ちをしている作者の詩的精神である。で福田氏は、独歩の小説はそうした抽象地帯への憧憬であり、彼の作品の「落ち」はそこへの飛躍である、と言うのである。

独歩は作中人物の生活を丹念にリアリステックに追求して行こうとする具象的な情熱に欠けていた。これを逆に言えば、常に抽象的な永遠の世界へ彼等を織り込もうという情熱が激しかったからである。彼の人物は永遠という抽象的なテーマのための点景的人物であった。従って彼の作品のうちで主人公の生涯を因果関係に基いて描いた「酒中日記」「運命論者」「正直者」「女難」などには独歩らしい特徴が稀薄であり、「忘れ得ぬ人々」「源叔父」「たき火」「牛肉と馬鈴薯」「號外」「窮死」「竹の木戸」「二老人」な

どに独歩らしい特徴が現われている。一概に前者が後者に劣っているとはいわないが、後者の方に詩人独歩の面目がよく出ているというのである。以上が短篇作家としての独歩に対する福田氏の観方である。正宗白鳥は、独歩が短篇小説しか書かなかったことを彼の体質の弱さによると見ている。それも無関係とは言えまいが、独歩の作品が短篇であるのは、本質的には彼の哲学的宇宙観と詩的精神の問題であろう。

そこで私はこのことに関連して、長篇的構図を以て書き出された彼の「暴風」が完結に至らずして擱筆されたことについて考えて見たい。「暴風」は独断的に家族を支配する封建的な父と、それに反抗する子、即ち父と子の相剋を描こうとしたもののようである。—或はテーマは別のところにあったのかも知れないが、描かれている範囲内に於てはそう推測するより外ないであろう—そして吾々はそこに志賀直哉の父と子の相剋を描いた作品のようなものが出来上ることを予想させられる。ところが志賀直哉には現実にそうした素材があったのであるが、独歩にはなかった。従って独歩に於ては私小説とはなり得ないのである。虚構として、一般的に社会問題としての父子の相剋を描かなければならないのである。しかし独歩はそうした社会問題や人間関係を描くことには余り熱意を持っていなかった。社会関係に於ては独歩は寧ろ事件の世界に飛込んで実行者たらんとした。

独歩がこの小説に描こうとする主題が何であったか明かではないが、彼の最初に設定した事件が彼の意図するものと齟齬を来すことに嫌気がさして投げ出したのではあるまいか、甚だ憶測的な観方ではあるが、私はそんな風に考える。

常に独歩の心を領していたものは、宇宙であり、人生であり、運命であり、自然であり、神であった。人間社会に於ける人間関係の屑々たる事件の如きは独歩の文学にとってはさしたる関心事ではなかった。但し独歩は代議士になろうとしたり、晩年には独歩社を興したり、随分、事業的野心も持っていた。然し一方には山林に存する自由に憧れる東洋的隠逸詩人の生活をも憶った。現実社会に於いて理想を遂行しようとする野心と、隠逸詩人の心境を憶う心と、この相反する両端を振子のように往きつ戻りつするのが彼の生活に於ける姿であったが、彼の文学はこの具体的な現実の生活が、常に抽象世界に憧れている彼の詩情によって洗滌されたところに生まれるので、小説は彼に於ては生活の探究や実験ではなかったのである。

田山花袋が太田玉茗と二人、はじめて東京郊外の渋谷村の丘の上の家に卜居している独歩を訪れたのは明治二十九年十一月の秋も末の一日であった。「東京の三十年」に花袋はその時の独歩の印象を次のように語っている。

国木田君の清い、哀愁を湛へた眉と、流暢な純な言葉とは、私の心をすぐ捉へた。「ああいふフレッシュな文章が書けるのも尤だ」かう少し話してゐる間に、私は思った。

また同書の「KとT」ではこうも書いている。

Kの話は上手で、軽快で、すっきりとしてゐて、どんな話をしてもすぐ人をその中に引張り込む。友人同志五六人集った席でも、Kはいつでも話の中心を握る。サアクルの中の帝王になる。傍で聞えてゐるTも、始めの中は面白く引張られて行くが、後には余

りに図に乗った形が憎くなる。従ってその話も半分は好加減のやうな感じがする。「先生またやってるな、また人を魅してゐるな、先生、あれで女の歓心を得るんだな」こんなふにTは思った。

その癖、TはKの本当の心持、純な心持、泣く時にはほろほろ涙をこぼすといふやうな心持を尊敬してゐる。またTが感心するやうなことをKはよく口にする。宗教と人生、恋愛と死、さういふ話題にかけては、Kは独特の深い信仰と瞑想とを持ってゐる。クリスチャンだから、それでああいふふうな話が旨いんだと打消しても、それでもTはいつも感心させられる。

独歩の面目が躍如として見えるような文章である。初対面で花袋が捉えられたのは、独歩の「清い、哀愁を湛へた」眉目もさることながら彼の「流暢な純な言葉」であったので、それを花袋は独歩の文章に結びつけて、「ああいふフレッシュな文章が書けるのも尤だ」と思ったのである。そしてまた独歩がその「軽快で、すっきりとしてゐ」る話上手で、いつも「サアクルの中の帝王になる」ことに一種の嫉妬を感じるが、彼の「泣く時にはほろほろと涙をこぼす」純な心持に引かれ、彼を尊敬せずにはいられないのである。独歩の話の旨さを「クリスチャン」だからと思っても花袋がいつも感心させられるのは、彼が語る人生や恋愛や死の問題が既成の思想ではなく、彼が痛切に求めるところから生れた独自の彼の思想であったからである。

独歩の小説は純描写体のものは少く、多くは説話体である。描写で運んでいてもその結構は福田恒存氏の所謂「落ち」へ持って行く結構である。勝れた短篇小説作家は、彼の談話はどうであろうとも、本質的には優れたストーリーテラーでなければならない。志賀直哉氏について武者小路実篤氏が、志賀氏の話がすっかり小説的観察になっているのに感心したと言っている。泉鏡花の話によると、尾崎紅葉が勝れて談話がうまかったというが、独歩の説話的妙味は紅葉のような洒落や皮肉や諷刺が口を衝いて出るというそういう江戸児的面白さ、つまり言葉の上の面白さではなく、思想と感情の清新さ、そしてそれが一箇の説話を形成する表現のうまさにある。

独歩は筆を落す前に苦吟に苦吟を重ねて想を練るが、一度筆を落せば最初の一、二枚はたちどころに章を成したと謂われている。紅葉が書いては消し消しては書きして苦吟し、直したところは張り紙をして書くので、しまいには原稿が張り合せの様に厚ぼったくなったと謂われるのと面白い対照である。独歩の主としたところは思想を如何なる結構に表現すべきかにあったので、章句の末節は余り意に介しなかったようである。独歩の関心は語句の末節ではなく表現意慾の本体であった。だから独歩の文章には間々字句に不用意な点も見受けられる。次に明治四十一年一月作の「波の音」を見よう。

初めて来て見ると成程、可なりな構造(かまへ)である。馬鹿丁寧に迎へられ、直ぐに一室に通されると、其処にお繁が寝て居る。八字髭を生やした若い医師、お繁の父母、其他に十七八と覚しき娘、十四五の男児、二十一二の此家の長男らしい青年など心配顔に居並んで居る。小使の清兵衛も席末に列した。「お繁や！先生様が来ましたよ。サア先生様が来ましたよう」とおろおろ声で呼んだ。少女は眼を開けて、自分を見て、にっこり笑って起上ろうとす

る。
この文では、「お繁」を呼んだのが誰であるか判然しない。書いてなくても言葉遣いからお繁の母とは想像されるが、そうした形式上の論理は独歩は頓着しない。また
但し、此狂気は折り折り思ひ出したやうに起るので毎日毎夜の事ではないとのことである。
この「事」「こと」の連続も感心しない。
自分は直ぐ用意して清兵衛の家に伴なはれた。小さな農家の一間に炉が切ってある。
一間は弁明る程の事のない一間しかないのである。
の「一間は……」以下の一センテンスも推敲を要するところであろう。しかしこうした点は小節として独歩の余り意に介しないところであった。
「病牀録」に独歩は次のように述べている。
余は未だ文章の形式に就いて腐心せしことあらず。作品の形は余の問ふ所に非ざればなり。唯、如何にして余が胸に充実せる思想を遺憾なく発揮せしむべきかと云ふ、其一事に腐心して止まず、故に彼の「第三者」の如く又「都の友へB生より」の如く書牘体を以てしたるもあり、又「牛肉と馬鈴薯」の如く半ば演説体を以てしたるもあり、又「悪魔」の如く、随筆体と小説体を混じたる如きもあり、又「酒中日記」の如く、全然日記体を以てしたるもあり、形式の上に於ける作品の好悪は、余の関する所に非ず。余の願ひは、唯、余が真実の声を伝ふるに在るのみ。
独歩の作品は題材やテーマによって形式を自由に変えているが、それは吉田精一氏も言うように「題材もしくはテーマの内面的論理に従って、作品が自然に構成されて行くというおもむきがあり、同じ短篇小説作家ながら芥川龍之介などに見られる形式偏重、乃至形式が作品に於ける重要な意味をしめるというようなことがないのである」つまり独歩がスタイルを作品によって変えているのは主題の内面的要求、更に言えば作品に於ける作者の感情の波動から必然的に要求されるので、スタイルの為にスタイルを工夫するのではない。例えば次に「號外」（明三九・八）の一部を挙げてみよう。
繻襦洋服を着た男爵加藤が、今夜もホールに現はれて居る。彼は多少キじるしだとの評がホールの仲間にあるけれども、恐らくホールの御連中にキ的傾向を持って居ない方はあるまいと思はれる。かく言ふ自分も左様、同類と信じて居るのである。
此処に言うホールとは、銀座何丁目の狭い、窮屈な路次に在る正宗ホールの事である。
精一本の酒を飲むことの自由自在、孫悟空が雲に乗り霧を起すが如き、通力を以て居玉ふ「富豪」「成功の人」「カーネギー」「何とかフェラー」「実業雑誌の食物」の諸君に在りては何でも無いでせう、が、我等如きに在りては、でない、左様でない。正宗ホールでなければ飲めません。
感心に美味い酒を飲ませます。混成酒ばかり飲ませます此の不愉快な東京に居なければならぬ不幸な運命のおたがひに取ってはホールほどうれしい所はないのである。
男爵加藤が、何時も怒鳴る、何と言うて怒鳴る、「モー一本」といふて怒鳴る。

彫刻家の中倉の翁が何といふて、其太い指を出す、「一本」悉く飲み仲間だ。悉く結構！

この小説は、一風格あるインテリ達が集まる渠山泊のような酒場の雰囲気をその中の一酒徒が表現している文体として非常に勝れたスタイルであろう。また独歩に多い書簡体形式の作品も、主題によってそれぞれ文体を異にしている。

天保十四年生の母上の方が明治十二年生の妻よりも育児の上に於て寧ろ開化主義たり急進黨なることとそその原因に候なれ妻は御存知の田舎者にて當今の女学校に入学せしことなければ、育児学など申す学問致せしにもあらず、言はゞ昔風の家に育ちしたゞの女が初めて子を持ちしまでゆゑ、無論少児を育てる上に不行届のこと多きに引換へ、母上は例の何事も後へは退かぬ御気象なるが上に孫可愛さの餘り平生は左まで信仰し玉はぬ今の醫師及び産婆の注意の一から十まで眞正面に受け玉うて、それはそれは寝るから起きるから乳を飲ます時間から何やかと用意周到のほど驚くばかりに候、更に驚くべきは小生が妻の為めにとて求め来りし育児に関する書籍などを妻は未だろく〳〵見もせぬ内に、母上は老眼に眼鏡をかけながら暇さへあれば片端より読まれ候て成程々々と感心致され候ことに候、右等の事情より自然未熟なる妻の不注意を甚だ気にし玉ふという次第然に妻は又「阿母(かあさま)それは母の務の何枚目に書いてありました」などと雑返(まぜつか)へしを申し候ことより、愈々母上は躍気と成り玉うて「お前はカラ旧癖だから困る」と答へられ候、「世は逆様になりかけた」と祖父様大笑ひ致され候も無理ならぬ事に御座候

先日貞夫少々風邪の気有し時、母上眼を丸くし、「小児が六才までの間に死ます数は實に夥しいものでワッペウ氏の表には平均百人の中十五人三分と記して御座ります」と講義録の口調そっくりで申され候間、小生も思はずふきだし候、天保生れの女の口からワッペウなどいふ外国人の名前を一種変てこりんな発音にて聞かされ候ことゆゑ其可笑しさ又格別なりしかば、遂に「ワッペウさん」の尊號を母上に奉ることゝ相成り候、祖父様の貞夫をあやし玉ふ時にも、

「ワッピョー〳〵鳩ぽッぽう」

と調子を取られ候位、母上も亦た敢て自からワッペウ氏を以て任じ居られ候、天保出来の女ワッペウと明治生の旧弊人との育児的衝突と来ては実に珍無類の滑稽にて、一家常に笑聲多く、笑ふ門には福来るの諺で行けば、追々と百千萬両何のその、岩崎三井にも少々融通してやるやう相成るべきかと内々楽みに致居候（「初孫」明三三？不詳）

大井君足下

君も僕も此の問題の第三者である。

第三者といふ奴は冷静なる判断を下し得る者である。そして結婚とか離婚とかいふ感情の問題には第三者ほど大切なものはないのだ。と先づ君も僕もあきらめて取りかゝるより致方があるまい。そこで先づ役割は僕がお鶴の代表者、君が江間君の代表者、代表者といふ言葉は穏當ではないが、今の場合、僕がお鶴の義兄であり、君が江間君の朋友であって見れば先づそんなものと見て可からう。由来叔父さんとか義兄さんとかいふ奴は妙な役廻りにはめ

られるものだ。
単刀直入に申上げるが、お鶴は脈があがったよ。だめだよ。此女の血管には最早愛とか恋とかいふ熱のある汁気はちょっとも流れて居ないぞ。平気の平三で居るぞ。君は第一にこの事実を江間君に傳へ玉へ。
女といふしろものは例の「機会」と同じことで前額に髪のあるばかり、後頭には無い。一度あっちを向くともうだめだ。捕へやうとすれば益々逃げて行く。江間君にさう言ひ玉へ、断然離婚しろと。（「第三者」明三六・一〇）
演説体を混じたものに「肱の侮辱」と「牛肉と馬鈴薯」とを挙げよう。
諸君！私は口無調法で、おまけに無学で、更におまけに文盲で、とても只今まで御講演になったやうな理化学的有益な「受賣」は出来ません。（前の二人の講演者ぢろりと矢島の顔を睨む、矢島は平気。）其処で私は只私自身が此目で見て、此心で感じた事の一をお話いたさうと思ひます。
ツマラないと思はれる方々は御退場を願ひます、と申す処ですが、さうでない。若し、私の談話中、席を起った方があったならば、其方は私を侮辱したものと致します。（静にコップに水を注いで一口飲む）
さて、お話はこれからですが、少々困った事が出来ました。（と言ひつゝ、洋服のポケットの所々を探す）お話の草稿が失なりました、（生徒はクス〳〵笑ふ、前の二人の講演者はザマを見ろといふ顔つき、木谷先生は心配の餘、半分椅子から起ち上って居る）。これは失禮、私は草稿は持って来なかったのでした。（生徒は益々笑ふ）私の草稿は腹の中に蔵って在るのでした。紙へ書いて其の一字が見えないと最う行きづまるやうな草稿ではなかったのでした。（「肱の侮辱」年代未詳）
「山林の生活！と言ったばかりで僕の血は沸きます。即ち僕をして北海道を思はしめたものもこれです。僕は折り〳〵郊外を散歩しますが、この頃の冬の空晴れて、遠く地平線の上に国境をめぐる連山の雪を戴いて居るのを見ると、直ぐ僕の血は波立ちます。堪らなくなる！然しです、僕の一念ひとたび彼の願に觸れると、斯んなことは何でもなくなる。若しも僕の願さへ叶ふなら紅塵三千丈の都会に車夫となって居てもよろしい。
「宇宙は不思議だとか、人生は不思議だとか。天地創生の本源は何だとか、やかましい議論があります。科学と哲学と宗教とはとれを研究し闡明し、そして安心立命の地を其上に置かうと悶いて居る。僕も大哲学者になりたい、ダルヰン跣足といふほどの大科学者になりたい。若しくば大宗教家になりたい。併し僕の願といふのはこれでもない。若し僕の願が叶はないで以て、大哲学者になったなら僕は自分を冷笑し自分の顔に『偽』の一字を烙印します。」
「何だね、早く言ひ玉へ其願といふやつを！」松木はもどかしさうに言った。
「言ひませう、喫驚しちゃいけませんぞ。」
「早く早く！」
岡本は静に、

「喫驚したいといふのが僕の願なんです。」
「何のこった！」
「落語か！」
人々は投げだすやうに言ったが、近藤のみ黙言て岡本の説明を待って居るらしい。
「斯ういふ句があります。
Awake, poor trouoled sleeper : shake off thy torpid night-mare dream.
即ち僕の願とは夢魔を振ひ落したいことです！」
「何のことだか解らない！」と綿貫は呟やくやうに言った。（「牛肉と馬鈴薯」明三四・一一）

晩年の作になると「窮死」「二老人」「竹の木戸」など、モーパッサンの短篇を思わせるような客観描写体の小説になって来るのである。

九段坂の最寄にけちなめし屋がある。春の末の夕暮に一人の男が大儀さうに敷居をまたげた。既に三人の客がある。まだ洋燈を點けないので薄暗い土間に居並ぶ人影も朧である。

先客の三人も今来た一人も皆土方か立んぼう位の極く下等な労働者である。餘程都合の可い日でないと白馬も碌々は飲めない仲間らしい。けれども先の三人は、多少か好結果たと見えて思ひ〳〵に飲って居た。

「文公、さうだ君の名は文さんとか言ったね。身体は如何だね」と角張った顔の性質の良さゝうな四十を越した男が隅から聲をかけた。

「難有う、どうせ長くはあるまい」と今来た男は捨ばちに言って、投げるやうに腰掛に身を下ろして、両手で額を押へ、苦しい咳息をした。年頃は三十前後である。

「さう気を落すものぢやァない、しっかりなさい」と此店の亭主が言った。それぎりで誰も何とも言はない。心のうちでは「長くあるまい」と言ふのに同意をして居るのである。

「六銭しか無い、これで何でも可いから……」と言ひさして、咳息で食はして貰ひたいといふ言葉が出ない。文公は頭の髪を両手で握んで悶いて居る。

めそ〳〵泣いてゐる赤児を背負ったおかみさんは洋燈を點けながら、

「苦しさうだ、水をあげようか」と振り向いた。文公は頭を横に振った。

「水よりか此方が可い、これなら元気がつく」と三人の一人の大男が言った。此男は此店には馴染でないと見えて先刻から口をきかなかったのである。突きだしたのが白馬の杯。文公は又も頭を横にふった。

「一本つけよう。矢張これでないと元気がつかない。代価は何時でも可いから飲った方が可からう」と亭主は文公が何とも返事せぬ中に白馬を一本つけた。すると角ばった顔の男が、

「何に文公が拂へない時は自分が如何にでもする。えッ、文公、だから一ツ飲って見な」

それでも文公は頭を押へたまゝ黙って居ると、間もなく白馬一

本と野菜の煮物を少しばかり載せた小皿一つが文公の前に置かれた。此時やっと頭を上げて、

「親方どうも済まない」と弱い聲で言って又も咳息をしてホッと溜息を吐いた。長顔の痩こけた顔で、頭は五分刈がそのまゝ伸びる丈のびて、もゝくちゃになって少しの光澤もなく、灰色がかゝって居る。

文公のお蔭で陰気勝になるのも仕方がない、しかし誰もそれを不平に思ふ者はないらしい。文公は続けざまに三四杯ひっかけて又も頭を押へたが、人々の親切を思はぬでもなく、又深く思ふでもない。まるで別の世界から言葉をかけられたやうな気持もするし、うれしいけれど、それがそれまでの事である事を知って居るから「どうせ長くはない」との感じを暫時の間でも可いから忘れたくても忘れる事が出来ないのである。

身体にも心にも呆然としたやうな絶望的無我が霧のやうに重く、あらゆる光を遮って立ちこめて居る。（「窮死」明四〇・七）

秋は小春の頃、石井といふ老人が日比谷公園のベンチに腰を下ろして休んで居る。老人とは言ふものゝ漸と六十歳で足腰も達者、至って壯健の方である。

日はやゝ西に傾いて赤蜻蛉の翼がきら〳〵と光り、風無きに風あるが如く浮々と飛んで居る。看るともなしに看て居る。空々寂々心中何等の思ふことも無い体

老人の前を幾組かの人が通った。老へるも若きも、病めるも健かなるも。されど誰あって此老人を気に留める者も無く、老人も亦人が通らうと犬が過ぎ行かうと一切お関ひなし、悠々行路の人、縁なくんば眼前千里、たゞ静かな穏かな蒼天が何時も平等に覆うて居るばかりである。

右の手を左の袂に入れてゴソ〳〵やって居たが、やがて「朝日」を一本取出して口に啣へた。今度はマッチを出したが箱が半分壊れて中身は僅に五六本しか無い。生憎に二本捨り損って三本目で漸と火が點いた。

スパリスパリと如何にも旨さうである。青い煙、白い煙、眼の先に透明に光って、渦を巻いて消えてゆく。

「オヤ、彼は徳ぢゃないか」

と石井翁は消えゆく煙の末に浮び出た洋服姿の年若い紳士を見て思った。芝生を隔てゝ二十間ばかり先だから判然しない。判然しないが似て居る。背恰好から歩き風まで確に武だと思ったが、彼は足早に過ぎ去って木蔭に隠れて了った。

此姿のおかげで老人は空々寂々の境に何時までも居る譯にゆかなくなった。（「二老人」明四一・一）

以上のように独歩はいろいろの形式の小説を書き、文体もそれに応じて変化しているが、その変化は、小説の形式が主題に応じて変化しているように、主題や場面に応じて変化させているのである。変化させていると言ったが、それは不知不識の間に最も適切な文体が生れて来るのでいとも自然なのである。それは天衣無縫ともいうべき独歩の自由な文学的精神（形式にこだわらぬ）の現われである。

しかし独歩が文体について決して無頓着であったという訳ではない。西鶴文体を試みたり欧文直訳的文体で書いてみたりいろいろ

やっている。

餅は圓感きが普通なるを故意と三角に捻りて客の眼を惹かんと企みしやうなれど実は餡をつゝむに手数のかゝらぬ工夫不思議にあたりて、三角餅の名何時しか其近在に廣まり、此茶店の小さいに似合はぬ繁昌、しかし餅ばかりでは上戸が困るとの若連中の勧告もありて、何はなくとも地酒一杯飲めるやうにせしはツイ近頃の事なりと。

戸数五百に足らぬ一筋町の東の外れに石橋あり、それを渡れば商家でもなく百姓家でもない藁葺屋根の左右両側に建ち並ぶこと一町ばかり、其処に八幡宮ありて、其鳥居の前からが片側町、三角餅の茶店は此の外れにあるなり、前は青田が盡きて塩濱、堤高くして海面こそ見えね、間近き沖には大島小島の趣きも備はりて、先づ眺望には乏しからぬ好地位を占むるが此の店繁盛の一理由なるべし。それに町の出口入口なれば村の者にも町の者にも、旅の者にも一休息腰を下ろすに下ろしよく、ちょっと一ぷくが一杯となり章魚の足を肴に一本倒せば其儘横になりたく、置座の半分遠慮しながら窮屈さうに寝ころんで前後正体なき、有りうちの事ぞかし。（「置土産」明三三・一二）

夜は更けて一艦の人、其職に在るものゝ外は悉く寝て了ひ、朔風帆綱をたゝいて艦上は物凄く鳴って居るけれど、室内は極めて静である。

士官は其一語一句力ある口調で—

僕は今日、公務を帯びて運送船備後丸に行ったが、彼の船には君も知って居る通り、海軍士官が乗って居る、其士官と用談を済まして帰るべく舷門のところまで来たのだ。（大尉は欧文直訳風の口調を使ふのが癖で、而も其癖を彼は得意として居るのである）すると一人の男が其處に立って居て他の船員と何事か物語りつゝあった。僕は何心なく舷門を下りかけると、其男が手を擧げて僕に敬禮するトタン、僕と彼とは互に顔を見合して驚いたといふよりか寧ろ訝かったといふが適当だろう。

如何も見たことのある男だと僕は思って、思はず足を止めた。けれども若しも此時、此船のボーイが来て今一度僕を士官の部屋に呼びもどさなかったならば、僕は不審と思ひつゝも直ちに舷門を下りて其まゝ小蒸汽に乗り、帰艦して来て了ったらうと思ふ。

運命は僕等を幸ひした。僕が二足三足、舷梯を下りかけるとボーイが飛んで来て僕を呼び止め、僕は再びケビンに呼びこまれて、互に失念して居た用務を辨ずべく、更に二十分ばかりを費した。（「馬上の友」明三六・五）

また外面非常に眞面目な教師の告白という形をとった「正直者」は「ます」調の敬語体にしている。

見たところ成程私は正直な人物らしく思はれるでせう。たゞ正直なばかりでなく、人並変った偏物らしくも見えるでせう。

けれども私は決して正直な者ではないのです。なまじ正直者と他から思はれたばかりに容易ならぬ罪を今日まで成し遂げて生涯の半ばを送って来たのであります。（「正直者」明三六・一〇）

以上のように独歩の文章はいろいろ変化に富んだ形で表現されているが、これを総括して彼の文体的特徴を考えてみると

一、センテンスが短く文が引締って居いて緊張したリズムを持

ち、文のテンポが速いこと
二、漢文的乃至欧文的骨骼の文体で表現が簡潔直截であり、粘着性がなくさらりとしていること
三、感覚的文体でなく精神的、直覚的文体であること
四、清冽で感性的な翳りがなく、明るさとユーモアを持っていること
五、描写型でなく説話型であること

等を挙げることが出来よう。今これについて説明を試みよう。

独歩の文章は漢文的骨骼の文章で、それは明治初期の啓蒙的先覚者達の文体の語句を平易にし文を口語体にしたようなもので、彼等の文章が漢文体の文章であったように骨骼は漢文体で表現が簡潔直截で男性的文体である。文章の論理の上からは続かなければならないような所でも彼はそれを短いセンテンスに切ってしまうのである。例えば、

それで石井翁の主張は、間に合ひさへすれば、それで行って行く。今更私が隠居仕事で候のと言って腰辨当で会社にせよ役所にせよ、病院にせよ、五円十円と稼いで見て如何する、私は永年のお務を終へて、やれやれ御苦労であったと恩給を頂く身分になったのだ。治まる聖代の難有さにこれぞといふ失策もせず、長病気にも罹らず長官にも下僚にも憎まれも嫌がられもせず、務め上げて来たのだ。最早斯うなれば私などは所謂る聖代の逸民だ。恩給だけで兎も角も暮せるなら、それを難有く頂戴して、すっかり慾から離れ其日々々を一家睦じく楽しく暮すのが當然だ。よしんば二十五円に十円殖えたら幾干の贅沢が出来る。――悉皆慾で慾には限がない――役目となれば五円が十円でも、雨の日雪の日にも休む訳には往かない、矢張腰辨当で鼻水を垂らして若い者の中に交ってよぼよぼと通はなければならぬ。オ嫌厭な事だ！

といふのである。（二老人）

の如きがそれで、「それで石井翁の主張は」……「といふのである」の主部と述部の間に位置する述部の修飾節が七つのセンテンスに切れているので、独歩は述部の従属節とした長い文章にはしないのである。そんな纏綿体の長文に表現することを嫌うのである。また次のようなものもある。

富岡竹次郎なる一個の小官吏が自殺を遂げた其の原因は発狂である、諸友が其死後の世話をした、母親が国元から来て其白骨の壷を持ち帰った。諸友はこれを新橋停車場に見送りした。斯く言へば自分の物語りは極めて単純である。（死）

また

自分は親友富岡の死を哭した。母親は眼を泣き腫らした、然し其れが何んであるか（「同右」）

のように「して、……して、……して、……した。」となすべきところを、「した、……した、……した、……した。」と文としては切りながら連続しているのである。これらは断続法ともいうべきで、意識としては続くところを終止形にし、しかしパンクチュエーションの上からは継続した形にしているのである。これは纏綿体に続けて行くそうとした文体を好まなかった故であろう。

独歩は高青邱の詩を愛し、四書五経を読むことを心掛けたことは

「欺かざるの記」にも書いているところであるが、漢文的なリズムが彼の性格によく適応したのであろう。

「独歩吟」などを見ても、七五の和歌調、漢文調、俗謡調などいろいろ試みているが、漢文調のものが一番勝れている。これは彼の詩想が漢文調の表現に相応しい一種の悲調を帯びたものであったからではあるまいか。

小説の中にも次のように漢文口調が地のまゝに現われて文の調和を破っているようなところも往々ある。

笑擽嬉々として此處に起れば、歓呼怒罵乱れて彼方に湧く。（忘れ得ぬ人々）

敵を見る怒の眼か、それにしては力薄し。人を疑ふ猜忌の眼か、それにしては光鈍し。たゞ何心なく他を眺むる眼にしては甚だ凄味を帯ぶ。（運命論者）

しかし、独歩の文体が直截簡明で、粘着性や鈍重性がなくサラリとし、キビキビした感じを与えるのは根本的には彼の文学に於ける態度によるものであろう。

同じくロマンチストとして出発した花袋や藤村らは、腥めた自我に従って生きようとする時、己を取巻く陰鬱にして不如意な環境―家庭や周囲の封建性と経済的貧困―に抵抗して生きなければならなかった。そのことは彼等を奮闘的にしたがまた感傷的にもした。そうした生活の反映として、彼等の文学は手法や理論としてフローベル、モウパッサン、ゾラなどの方法や理論を学んだに拘らず、その心情に於ては多分にセンチメンタルとロマンチシズムを持っていた。彼等の文体が感傷的情感的な翳りを帯びているのはその為である。

独歩の生活環境は、花袋のような貧困な没落士族でもなく、藤村のような没落期にある地方地主の家の陰鬱さもなく、家は豊かでなくとも弟と共に家を離れて意のままに生活し得る環境にあった。彼等が没落士族や没落地主の子弟であったに対して独歩は新しく新時代に出来て来たサラリーマン階級の子弟であったという社会史的立場の相違が考えられてよいであろう。

その上彼には青年時代から哲学的傾向が強く、常に人間の現実生活を超えた宇宙や人間の運命や永遠というような抽象的な世界に想いを潜めることが出来たのである。

しかも独歩は人間社会の喜憂に没頭している時も、宇宙、人生、神、永遠、運命ということを忘れることが出来なかった。そして常に宇宙の永遠に対して人間の孤独を感じていたのである。そこに独歩の文学（そしてまた文体）に含まれた悲調がある。それは花袋などの甘い感傷や陰鬱な生活感覚でもなく藤村のジメジメした粘着的な感傷や打算でもない、東洋の詩人或は哲人的な悲愴があるのである。

妻に逃げられたという事件は、独歩の受けた最も大きな打撃であり、その傷痕は長く残って彼の文学にある翳りを残していたとは思うけれども、そのことは社会の封建性とは関係のない妻の自由意志或は性格によったことで、それについて独歩は妻の性格を恨みこそすれ、それによって社会的封建性を恨む何もなかったのである。従ってそれは彼個人の世界観の問題であって、社会的要因として彼に作用するものではなかった。

文学は独歩に於ては、自我獲得の戦跡もしくは、生活不如意の溜息の捨て場ではなく、自己放下の場であり、人間諦観の場であったのである。

Tの日記の全く空想的であるのに反して、Kの日記は苦しい事實と悲しい記録で満されてゐた。Kの卓の上には詩集や小説と雑っていつも必ずその日記の一冊二冊が載ってゐて、やがて着手すべき處女作の材料を其處から探し出すやうにしてかれはそれを繰返しながら昔を思った。Kはまたその日記の中から楽しかった辛かった恋の事実を思ひ出して時を過した。「もう過去だ。完全に過去だ」かう独語した。

と花袋が書いているように、独歩の小説の題材の多くは「欺かざるの記」の中から生まれて来た。「欺かざるの記」は独歩の苦悩に満ちた私小説であった。独歩が私小説を書かなかったのは、もう書く必要がなかったからである。

要するに悉逝けるなり
あらずあらず彼等はあらず

と、「独歩吟」に詠っているように、彼の小説は回想と諦念の中から私小説が洗滌されたところから生まれて来たのである。彼の文体が感傷的な翳りがなく、粘着性や重苦しさがなく、サラリとして明るく、ユーモアさへ持っているのはこの為である。

簡潔直截に最短距離的に表現して行く独歩の文体はまたテンポが速く、直線的ではあるが屈折に富んだその姿態は頗るリズミカルで変化に富んで居り、直線的リズムであるが故に爽快である。

老人連、全然惚れ込んでしまった。一にも大河、二にも大河。公立八雲小学校の事は大河でなければ竹箒一本買ふことも決定るわけにはゆかぬ次第。校長になってから二年目の升屋の老人、遂に女房の世話まで焼いて、お政を自分の妻にした。子が出来た。お政も子供も病身、健康なは自分ばかり。それでも一家無事平和に、これぞといふ面白いこともない代り、又これぞといふ心配もなく日を送って居た。

處が日清戦争、連戦連勝、軍隊萬歳、軍人でなければ夜も日も明けぬお目出度いことゝなって、そして自分の母と妹とが堕落した。（酒中日記）

この「酒中日記」などは西鶴の文体を口語にしたようなキビキビした文の運びであり、従来の口語体のマナリズムを打破している。

「號外という題だ。號外、號外！號外に限る、僕の生命は號外に在る。僕自身が號外である。然り而して僕の生命が號外である。號外が出なくなって、僕死せりだ。僕は、これから何をするんだ。」男の顔には例の惨痛の色が現はれた。

げに然り、我が加藤男爵は何を今後に為すべきや。彼は兎も角も衣食に於て窮する所なし彼には男爵中の最も貧しき財産ながらも、猶且つ財は是れ在り、狂的男爵の露命をつなぐ上に於て、何のコマルところは無いのであるが、彼は何事も為て居ない。「露西亜征伐」に於て彼は生活の意味を得た。と言はんよりも寧ろ、国家の大難に當りてこれを擧國一致で喜憂する事に於て其生活の題目を得た。ポーツマウス以後、それが無くなった。

彼れ男爺、たゞ酒を飲み、白眼にして世上を見てばかり居た加藤の御前は、がっかりして了った。世上の人は悉く、彼等自身の

問題に走り、そが為めに喜憂すること、戦争以前のそれの如くに立ち返った。けれども、男は喜憂目的物を失なった。即ち生活の對手、もしくはまと、或は生活の煽動者を失なった。

がっかりしたのも無理はない。彼の戦争論者たるも無理はない。（號外）

独歩の文章は眼よりも耳に訴える文章である。彼の文章の妙味は音読することによって味われる。彼は耳に響くリズムを重んじて、句読点の文法的論理を無視することがある。

小説の型は純粋に描写型のものは極めて少く説話型であり、しかもその中に談話や議論が多い。そしてそういう作品に独歩の縦横の才気が発揮されウエットやユーモアが現われる。独歩の文体の爽快なリズムは花袋が言ったように、独歩の実際の談話のリズムと共通なものであったろうことを思わせられるのである。

独歩の文章には暗喩的な警句はあるが他の作家に比べて比喩が少い。比喩は言葉を感覚的にヴィヴィッドにする方法であるが、感覚的なものを追求して描こうという志向を持たない独歩の文章に於ては比喩を多く必要としないからである。比喩だけでなく修飾語が一般に少いのである。彼の文体は直覚的に事象の核心に参入し、それを端的に表現しようとする文体である。彼はその参入する事象の核心に宇宙の永遠を見、生命の孤立を感じ、孤立は他者への愛を求める情となる。人間は永遠の宇宙を背景として存在するが故に美なのである。かくして独歩の文学は人間の営みを永遠なるものの中に織込むことによって精神的なものとするのであるが、彼の文体はそうした志向を潜めて精神の世界へ上昇しようとする姿勢をとっている。